

特別支援教育部

部長 金森 茂生

研究主題

子どもたち一人一人が、共に学びに向かい 生きる力を育む教育をめざして

趣旨

令和3（2021）年度より中学校で新学習指導要領が実施されました。今回の改訂において、インクルーシブ教育システムの構築、多様な学びの場、合理的配慮の考え方、すべての学校で特別支援教育を推進するということが示されています。そして「何のために学ぶのか」を共有しながら「何ができるようになるか」を明確にするために、①知識及び技能②思考力、判断力、表現力等③学びに向かう力、人間性等の三つの柱で再整理されています。中でも「学びに向かう力・人間性等」の涵養(水が自然に染み込むように、無理をしないでゆっくりと養い育てること)は私たちが特別支援教育において目指してきたことでもあります。子どもたちが周りの温かいまなざしのもと認められ、「自己有用感」つまり、「自分が役に立っている、認められている、必要とされているという感覚」を育てることで社会参加の基礎としての「生きる力」を育成することにつなげることが望まれています。

これまで大阪市においては障がいのある子どもの人権尊重を図り、地域で「共に学び、共に育ち、共に生きる」ことを基本とした教育を推進してきました。学校が学びの拠点として、特別な教育的ニーズのある子どもと周りの子どもが相互に交流し学習を深めていき、人権教育の取組を通じて「障がい理解」を推進し、研究部としても特別支援教育を全校的な課題として職員全体で取り組んでいけるように教育実践・研究と発信をより一層進めたいと思います。

1. 全市研究発表会の報告

＜1＞内容

講演 「ポジティブ行動支援を理解して実践する～問題行動への対応を中心に～」

講師 大阪教育大学教育学部 准教授 野田 航 様

ポジティブな行動をポジティブな方法で支援するというポジティブ行動支援（PBS）の紹介から、問題行動の捉え方やその解決方法について、様々な例を挙げながら詳しく解説してくださいました。

問題行動は、問題のある環境との相互作用の結果として現れるという考え方や問題行動は、子どもたちからのメッセージという捉え方、また、適切な行動を増やすことにより、間接的に問題行動が減るという方法などは、日々の教育活動を振り返りながら、共感を持って学ばせていただくことができました。

＜2＞アンケート結果

参加された先生方を対象に、Microsoft Forms を利用したアンケートを行いました。講演内容については、ほぼ肯定的な回答であり、通信環境についても、概ね不具合はなかったという結果でした。開催形式については、オンライン開催がよいという回答が最も多くを占めました。今後取りあげてほしいテーマはという質問には、自立活動・進路指導・通級指導教室などのキーワードが見られました。

＜3＞今後へ向けて

Microsoft Teams を利用した全市研究発表会は2回目ということもあり、大きなトラブルもなく実施できました。配信拠点校から各校へオンライン配信するという開催形式は、今後も継続されると思われます。そのため、チャットが利用できなかったことなど通信環境の不具合をより減らすことや参加される先生方のよりニーズに合ったテーマを選ぶことが求められていくと考えます。

これからも、必要な工夫や改善をしながら、先生方、子どもたち、特別支援教育部にとって実りある研究発表会となるように取り組んでいきます。

2. 近畿大会の報告

令和4年度全日本特別支援教育研究連盟

第59回 近畿特別支援教育連絡協議会 大阪市大会

第6分科会 交流及び共同学習

演題 交流及び共同学習に安心して参加できるための取組～安心した学校生活のために～

提案者 大阪市立市岡中学校 以倉 康平 教諭

取り組みの目的

Aくんは自閉スペクトラム症で療育手帳B2を所持している。小学校から特別支援学級に在籍しており、小学校の交流及び共同学習では特に本人が困っている様子は見られず、参加できていた。そのため中学校でも同じように交流及び共同学習ができると考えられていた。しかしAくんは中学校入学後馴染むことができず、生徒や教師に不適切な態度を取ったり、授業の規律を乱したりと落ち着かない行動が目立ち、中学校入学当初に計画されていた交流及び共同学習に参加することが難しい状況だった。しかし、Aくんも保護者も「みんなと学校生活を送りたい」という願いを持っていた。そこでAくんが安心して交流及び共同学習に参加できるように様々な取組を行った。

本校について

大阪市立市岡中学校は全学年5クラスの200人程の生徒数で、全校生徒は600人程の規模の学校である。生徒数は年々増えており、特別支援学級数も増え続けている。Aくんが在籍している時は6学級の30人程であった。

実践の内容

1. 関係者の共通理解、情報交換

- ① 通常学級担任
- ② 学年会（Aくんが所属する学年団）
- ③ 校内委員会（特別支援委員会、特別支援小委員会）
- ④ 家庭
- ⑤ 部活動顧問
- ⑥ 学年団以外の授業者

交流及び共同学習を進めていく中で関係者が特性を理解しておくことや、日頃からの情報交換も大切であると考える。Aくんは行事前に不安になることや学期の終わりごろなどの疲労がたまり始めたころなどは落ち着きが無くなることが多かった。しかし落ち着いている時は静かに過ごしており、クラスの中でもほとんど目立たなくなっていた。それから2年生の後半からは曜日によっても落ち着き具合が違うこところが見られ始めた。そのため毎日の情報交換はさらに大切になった。

また、家庭との情報交換も重要であり、Aくんの行事や進路への本音を保護者から聞くことができ、家庭での様子を聞いて支援方法を変更したりすることができた。また学校での落ち着かない様子を伝えると家庭で指導をしていただいた。そして学校や家庭の様子を病院で相談し、助言をもらったり、服薬を変更してもらったりした。家庭との情報交換は、家庭や病院での迅速な対応につながり、Aくんの安心した学校生活作りに大きな効果があった。

学校内の連携、学校と家庭との連携は、Aくんにとって関わる者全てが情報を共有していることを示すことができた。このことでAくんに多くの人が見守っているという安心感を与えること

ができた。

2. 体制の構築

Aくんの共通理解や情報交換は日ごろから行っていたが、校内委員会などの会議の場でも情報交換、支援方法の確認などを行った。

① 校内委員会（特別支援委員会、特別支援小委員会）

特別支援委員会は全教職員が参加する会議で、特別支援学級に在籍する生徒や、通常学級に在籍しているが支援が必要であると思われる生徒の情報交換が行われ、年度当初と学期末の年4回行われる。特別支援小委員会は管理職、養護教諭、特別支援学級担任、各学年からの代表者、スクールカウンセラーで構成されており、特別支援委員会よりもより細かく情報交換や支援体制について話し合い、特別支援委員会が開かれない5月6月9月10月11月1月2月の年に7回行われる。ここではAくんの近況報告や交流及び共同学習の実施状況、その後の計画について話し合った。

② 職員会…月に1回

月に一度開かれる全職員を対象とした学校全体のことについての連絡会で、Aくんの個別の別室を設置することやテストの配慮、行事にどのように参加するかなどを全職員に周知することができた。

③ 進路指導委員会、進路指導小委員会…月に1回

進路指導委員会は管理職、進路指導主事、生徒指導主事、教務主任、学年主任、3年生学年の先生で構成された委員会で、3年生の進路について話し合う。進路指導小委員会は進路指導主事と3年生学年の教員で構成されており、進路指導委員会より頻度も多く、進路について細かく話し合われる。Aくんは普通高校の進学を希望したため、それに沿えるように支援する内容を共通理解することができた。

④ 「特別支援教育に関する巡回指導」の活用…年に2回

大阪市教育委員会事務局指導部インクルーシブ教育推進室が「特別支援教育に関する巡回指導」を年に二回、申込制で行っている。これは巡回アドバイザー（臨床心理士、作業療法士、理学療法士、言語聴覚士）および指導主事が相談内容に応じて各校を巡回し、教職員に対する指導助言を行い、校内支援体制の強化を図るものである。この制度を活用し、Aくんの支援体制について、指導助言を受けることにより、検討や改善をすることができた。

3. 指導計画の作成

保護者とAくんとで作成した個別の教育支援計画をもとに、Aくんの学習内容や交流及び共同学習の計画を作成した。保護者とAくんが大事にしていたことは「みんなと学校生活を送りたい」だったので、交流及び共同学習では他の生徒と共に学習する機会を多く作るようにし、その設定に合わせて学習や生活の目標を定めていった。

それで目標に沿うために特別支援学級ではソーシャルスキルトレーニングなどの人との付き合い方を学習する時間を定期的に設けた。そして体育大会、修学旅行など通常の授業に参加するよりも非日常的な交流及び共同学習の前には行事の内容をより詳しく伝えたり、トラブルを想定して対処する方法を学習したり、その他に不安に思っていることを聞いて解消できるように解決策を提示したりし、Aくんが安心して参加できるようにした。

4. 活動の実施

① 事前

活動前にはAくんがどこまで他の生徒とともに活動を行うかを検討し、それに応じて特別支援学級担任がAくんにどのように支援していくかを計画した。また通常学級担任などが、その計画

に応じて周りの生徒がAくんと活動しやすいように、通常学級の活動する班のメンバーや配置を調整した。それから通常学級の教員が、日ごろからAくんとクラスメイトとの理解が進むように働きかけを常に行なうようにした。例えば、クラスメイトの前で通常学級担任がAくんと交流する姿を見せることで、Aくんとの接し方の見本を示すような方法である。この働きかけは通常学級担任や部活動顧問などいろいろな立場の教員に応じて行われたため、Aくんや他の生徒は様々な接し方を学ぶことができた。

② 活動

交流及び共同学習の内容は、Aくんの体調や活動の内容に応じて大きく3つの方法で行われた。1つめは交流及び共同学習中に特別支援学級教員が付き添って、Aくんの学習を支援する形で最も多く実践された基本的な方法である(α)。2つめはAくんが普通高校を目指すため、集団の中で授業に慣れることができるように特別支援学級教員がAくんを間欠的に支援する方法である(β)。そして3つめはAくんと同じ空間に活動中は特別支援学級教員がいない形で、他の生徒との交流に重点を置いた学習活動で取られる方法である(γ)。これら3つの方法で交流及び共同学習を行った。それからAくんの体調によって交流及び共同学習を継続することが難しいと授業者や特別支援学級教員が判断した場合は中止するか特別支援学級教員が関わる度合いを調整した。

落ち着かない行動が減り、交流及び共同学習を再開させた当初は、Aくんが不安定だったこともあり、αの方法がほとんどであり、特別支援学級教員の付き添いが無ければ、他の生徒と共に教室で黒板を写したり、質問に答えたり、理科の実験をしたり、裁縫をしたりすることができなかつた。しかし、学校生活に安心感を覚え、落ち着いてくるとβやγのような形で交流及び共同学習をすることが増えていった。

5. 合理的配慮

(ア) 環境の整備

Aくんは環境の変化により気持ちの安定が大きく左右されることがわかつた。小学校から中学校という大きな環境の変化では中学校生活に馴染むことが出来ず、落ち着かない様子が多く見られた。また特別支援学級でも新しい環境であることや他の特別支援学級の生徒が気になって集中することや落ち着くことが難しい状態であった。そのため、Aくんが一人で過ごすことのできる部屋を設けることにした。Aくんの部屋は、放課後以外は使用していないAくんの学年の通常学級にできるだけ近い生徒会室とした。Aくんは登校したら生徒会室を中心として学校生活を送り、必要に応じて通常学級や特別支援学級に行くことになり、休み時間も生徒会室で過ごした。その生徒会室ではAくんと教員しかいないため、Aくんは心を落ち着かせることができた。この環境の整備により、Aくんの学校生活の中で落ち着いて過ごせる時間が増えていき、交流及び共同学習も計画できるようになった。

そのためAくんが卒業するまでAくんが一人で過ごすことのできる部屋を設ける取り組みは続けられた。1年生と2年生はAくんが一人で過ごすことのできる部屋の生徒会室と同じフロアに通常学級を設置する配慮を行い、交流及び共同学習を実行しやすくした。3年生では、中学校生活にも慣れてきたので学年のフロアを変更し、Aくんが一人で過ごすことのできる部屋が曜日によって生徒会室とカウンセリングルームを使うことに変更になった。Aくんはそれでも落ち着いて過ごすことができた。

(イ) 学習への配慮（見通しをもたせる、視覚支援）

Aくんは見通しが立たないことには不安がり、落ち着きがなくなるという特性があるので、見通しをもたせる配慮を行った。まずはAくんがいつもいる生徒会室やカウンセリングルームには

時間割表、校時表、交流及び共同学習の予定を書くホワイトボードを設置した。

特別支援学級での学習では絵や写真を多く用いて、視覚支援を行った。道徳の授業では読み物の教材の内容理解を助けるために紙芝居を用いたり、Aくん専用のホワイトボードを渡すことで読み物教材の内容や意見をまとめたりして視覚化できる教材を多く作った。この結果、道徳の読み物教材の内容を理解できるようになり、内容に沿った感想を言えるようになった。そして道徳の教材の考え方やAくん自身の意見を可視化することで、意見を深めることができ、教材のねらい通りの考え方ができるようになった。

下の写真は特別支援学級でAくんの道徳で使用した視覚支援のための教材である。まず1は道徳の教科書を読むだけでは、視覚的な情報が少なかったため、教科書の内容を紙芝居に作り直したものである。Aくんは特別支援学級教員の絵を気に入り、興味を持って授業に参加できた。次に2はAくん専用のホワイトボードで、自由に使わせた。Aくんは自主的に物語の内容や自分の考えを整理するのに、このホワイトボードを積極的に使用した。最後に3は物語の内容を深く考えるためのワークシートで、このワークシートに書き込んでいくとねらいに沿った考え方が導き出せるようになっている。1と3は特別支援学級教員が授業ごとに作成するため大変であったが、内容理解が進むため、とても大事な視覚支援であった。

(ウ) 他者の感情の理解を助けるためのトレーニング

自分の感情に気づいて、その感情と上手に付き合ったり、他者と適切なコミュニケーションを取ったりする力を育成するための方法としてソーシャルスキルトレーニングを週に1時間程度取り入れた。2年生の終わりから卒業まで続けて、Aくんの話し方や表情が柔らかくなっていた。

(エ) 意思疎通の補助

日によって気持ちの変化が大きいので、Aくんが日頃の気持ちを表現できるように、「気持ちの温度計」をホワイトボードに設置した。教員も気持ちの温度計を参考に学習活動ができるうえ、Aくんの自己認知に繋がり、こんな日は気持ちが落ち着かない日だとか、このような日は学習が頑張れるなどというふうに自分で理解することができるようになった。

取組の成果と課題

1. 成果

中学校に入学した頃は落ち着かないことが多く交流及び共同学習が難しい状況だった。しかし、様々な取組の中で、Aくんが安心して学校生活が送れるようになり、落ち着いて過ごせることが多くなり、交流及び共同学習に参加することができるようになった。そして修学旅行の時に、クラスメイトに呼ばれて写真を撮っているAくんの光景を見て、教員はAくんが、クラスの一員として自他ともに認められる存在となったと感じた。

効果的だった点を整理すると、次のことが挙げられる。

- ・一人で落ち着いて過ごすことのできる空間を設けたこと
- ・情報交換を密にして学校全体で支援を行うことで、本人が、みんなにわかつてもらえて安心できたこと
- ・ホワイトボードなどで予定や課題の内容などを視覚的に示し、本人が自分で確認したり考えたりできるようにしたこと
- ・ソーシャルスキルトレーニングや「気持ちの温度計」の取組などにより、自分の感情や相手への伝え方などについて理解を進めたこと

また、Aくんの変化だけでなく、他の生徒もAくんの特性を理解して付き合えるようになった。Aくんは落ち着かない時は、特定の生徒に過度なコミュニケーションをとってしまうが、その生

徒はAくんが困っていると手助けをする場面が見られた。そして授業中に落ち着かない様子だとクラスメイトは注意したり、状況に応じて適度に距離をおいたりするなど、Aくんを理解しながらクラスの一員、学年の一員、中学校の一員として接することができるようになった。また例えば、Aくんの係の仕事や大勢の前での発表といった場面では、フォローしたり頑張りを称えたりすることができた。そして卒業前のクラスのお別れ会では、その日のAくんは最初なかなか落ち着けなかったのだが、他の生徒は気にすることは無く、以前のように活動が中断してしまうこともなく、Aくんを輪に入れた状態でお別れ会は進行していった。そしてクラス全体が盛り上がりしていく中で、Aくんは落ち着きをとりもどしていき、一緒に楽しんでいる姿が見られた。

そして道徳の感想から、Aくんの通常学級のクラスメイトはAくんを理解して優しく接するのを勿論だが、他の生徒に対しても優しく接することができるようになっていることが読み取れたと報告があった。ここからAくんを理解して接するという行動が、他の生徒に対しても、相手を理解して接することに繋がったと考えられる。

3年間の中学校生活でAくんは自分のことをより一層理解できるようになり、他の生徒も他人を一面的に見るのはなく、多面的に見て接していくことができるようになった。

取組を通して、交流及び共同学習は、教員らが本人との接し方のモデルを周囲に示しながら関わりをつなぐことのできる場であり、生徒同士が共に学びながら、接し方や互いを尊重する気持ち、態度を身につけていくことができる場なのだと実感した。そのためには本人の特性をふまえて丁寧に設定していくことが大切であると改めてわかったのも成果である。

2. 課題

Aくんは希望通りの普通高校に進学した。もしも中学校に入学した時のように、再び大きな環境の変化により落ち着かない様子が多くなると、高校で本人がしたい活動が十分できなくなる可能性はある。しかしこの3年間でAくんの自己理解が大きく進んでいるので、丁寧に引き継ぐことにより、以前より落ち着いて高等学校への移行ができるだろうと考えた。Aくんに寄り添える周りの継続的なサポートは今後も必要であると考えられる。そのため進学先の高校とは入学前に通常学級担任と共に、高校でのAくんの学年主任とクラス担任、特別支援教育の経験が深い担当者へ情報提供を行った。またAくんの家庭とも定期的に連絡しAくんの様子を聞いていくつもりである。この先はAくん自身の努力も必要であるが、特性から希望通りの活動ができるかが心配であると同時に高校生活をどのように送りどのように成長するかが楽しみでもある。

高等学校で求められる学習内容や活動は、本人にとってより難しいものになり、困難にぶつかることもあるだろうが、中学校3年間の取組からわかった効果的な手立てを丁寧に引き継ぐことで、本人・保護者・進路先の指導者間で共通理解し、今後も本人の成長に応じて適切に見通しを立てながら取り組んでいくことが大切である。

3. 研修活動

＜1＞研修会の内容

インクルーシブ研修会

第1回 令和4年7月4日（月）

会場 大阪市立巽中学校（Teamsでも同時に配信）

内容 テーマに沿った内容の情報交換 テーマ：「自立活動」、「不登校」

第2回 令和4年11月29日（火）

会場 大阪市立巽中学校（Teamsでも同時に配信）

内容 講義「通級って何？～通級指導教室の今とこれから～」

大阪市立西中学校 寺本 紀夫 教諭

＜2＞概要

昨年度から実施している「インクルーシブ研修会」を今年度も実施しました。実施した2回とも、会場校への集合形式と、Teamsでのオンライン形式の2つの参加形態をとって行いました。

第1回は会場に15名、オンラインで10名の先生方にご参加いただきました。「自立活動」と「不登校」をテーマに、グループごとに情報交換を行い、各校での実践等の情報を交換しました。どのグループも話に熱が入り、時間が足りないグループばかりでした。

第2回は、「通級指導教室」をテーマに、通級指導教室を担当されていた先生を講師に招き、講義と質疑応答を行いました。参加者は会場に18名、オンラインで41名の合計59名にご参加いただき、過去最多の参加人数となりました。講義では、通級指導教室の概要や、特別支援学級との違い、他の自治体の取り組み等を取り上げ、通級指導教室についての理解が深まる内容でした。質疑応答では会場、オンラインともに、学校で対応する際の具体的な質問がたくさん飛び交い、終了予定時間の間際になるまで質疑応答が続く様子でした。

＜3＞アンケート結果

参加された先生方を対象に、Microsoft Formsを利用した事後アンケートを行いました。第1回のアンケートでは「研修内容は自校の取り組みの参考になるようだったか」という項目の9割が肯定的な意見でした。

第2回のアンケートでも肯定的な意見が9割近くを占める結果でした。

＜4＞今後へ向けて

昨年度よりも参加人数が増えることとなったが、その要因は、先生方のニーズに合ったテーマの設定ができているということが挙げられます。これからも先生方のニーズに合った研修内容や、研修時間を設定し、大阪市の特別支援教育や、インクルーシブ教育推進に関わる研修会に、継続して取り組んで参ります。

4. 活動報告

＜1＞企画・立案

- ①担任者会全体会 学校特別支援学級担任を対象に会の円滑な運営と情報交換を目的とする。
②企画会 定例月1回
③担任者会 7月、9月、11月、2月の4回
④各行事実行委員会 行事ごとに事前2回、事後1回実施
⑤小中連携 今年度開催された近畿特別支援教育連絡協議会大阪大会(小学校主催)において小学校と連携して企画運営を進めた。

＜2＞研究、研修活動、広報活動、行事について

- ①研究活動(大阪市立中学校教育研究会特別支援教育部担当)

- ・各ブロック研究会 9/2(金)
- ・全市一斉研究発表会 10/12(水)
- ・近畿特別支援教育連絡協議会大阪市大会 8/5(金)
第6分科会(交流及び共同学習)において誌上発表
- ・年度末研修報告会 2月下旬

②研修活動

- ・インクルーシブ研修会

昨年度よりインクルーシブ・フレッシュ研修会から名称を改め、「ダイバーシティ&インクルージョンの観点を取り入れた教育実践に向けて」を目的とした研修会を新たにスタートした。

③広報活動

- ・機関誌「特別支援教育」※中教研ホームページ特別支援教育部に掲載中
1年間のまとめとして年に1回発行(通巻64号)
- ・会報「中養タイムズ」
会員への情報提供、活動報告など年3回 9月、12月、3月に発行

④行事

- ・第65回合同うんどう会 6/1(水)ヤンマーフィールド長居(長居第2)
- ・第65回ふれあいステイ 新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止
- ・第11回ふれあいディキャンプ 新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止
- ・第60回さくひん展
1/26(木)～2/1(水)大阪市舞洲障がい者スポーツセンター(アミティ舞洲)

5. 年度末報告会 資料

大和川中学校の取り組み

大阪市立大和川中学校 山陰 里奈

検査結果の正しい理解と活用～ブロック研究発表会を受けて～

大阪市立矢田中学校 塚本 一清

大阪市立阿倍野中学校 浦野 莉佳